

第3章

子どもの生活時間に見る男女の違い

佐藤 香 (東京大学教授)

【要旨】

全体平均時間を用いて男女の違いをみると、どの学校段階でも性別によって活動時間が異なる活動があり、生活パターンに違いがあることがわかる。女子は睡眠時間が短く、身のまわりのことや食事の時間が長い。また、ゲーム機で遊ぶ時間や中・高校生の部活動の時間では男子のほうが長い。行為者率と行為者平均時間を用いた分析からは、学校の宿題は女子のほうが「真面目」で「丁寧」に取り組んでいるが、宿題以外の勉強については、性別というよりも個人差が大きいことなどが明らかになった。各行動についての男女差を合計してみたところ、学校段階が上がるにつれて男女の生活パターンの違いが拡大しており、男子は「学校空間」での時間が長く、女子は「私的空間」「公共空間」での時間が長くなっていることが示された。

はじめに

日本人の大人（成人）の生活時間については、男性の長時間労働と性別役割分業による男女の大きな違いが特徴として指摘されている。とくに、後者の生活時間における性別役割分業の影響は、国際比較からみても、きわめて重要な点とされてきた（たとえば、伊藤・天野1989、大竹1997など）。性別役割分業と関連して、6カ国の国際比較調査データ¹⁾を用いた矢野・連合総合生活開発研究所（1998）は、女性の生活時間のパター

ンにみられる未婚／既婚の別による違いが日本で最大であるという知見を得ている。

ただし、社会生活基本調査のデータなどをみても、未婚であっても男女による生活時間の違いは存在する。こうした違いは、どの年齢段階で発生するのだろうか。本章では、こうした関心から、男女の違いに注目した分析を行う。

第1節 学校段階別にみた平均行動時間

本節では、各行動についての男女の平均時間に着目する。全体平均時間は、各社会集団が、集団としてどれだけの時間をそれぞれの行動に費やしているかを示す指標である。図1～図3に、各行動の男女別全体平均時間を示した。学校段階別にみていこう。

小学生では、0.1%水準で平均値に有意な男女差がある行動が8項目ある。睡眠、身のまわりのこと、ゲーム

機で遊ぶ（以下、ゲーム）、学校の宿題（以下、宿題）、習い事の練習、音楽、家の手伝い、ペットと過ごす、である。男子のほうが女子よりも長い時間を費やしているのは睡眠とゲームで、それ以外の6つの行動については、女子のほうが長い時間を費やしている。1%水準で有意な行動は食事と屋外での遊び・スポーツ（以下、屋外遊び）で、食事は女子が長く、屋外遊びは男子のほうが長

第3章 子どもの生活時間にみる男女の違い

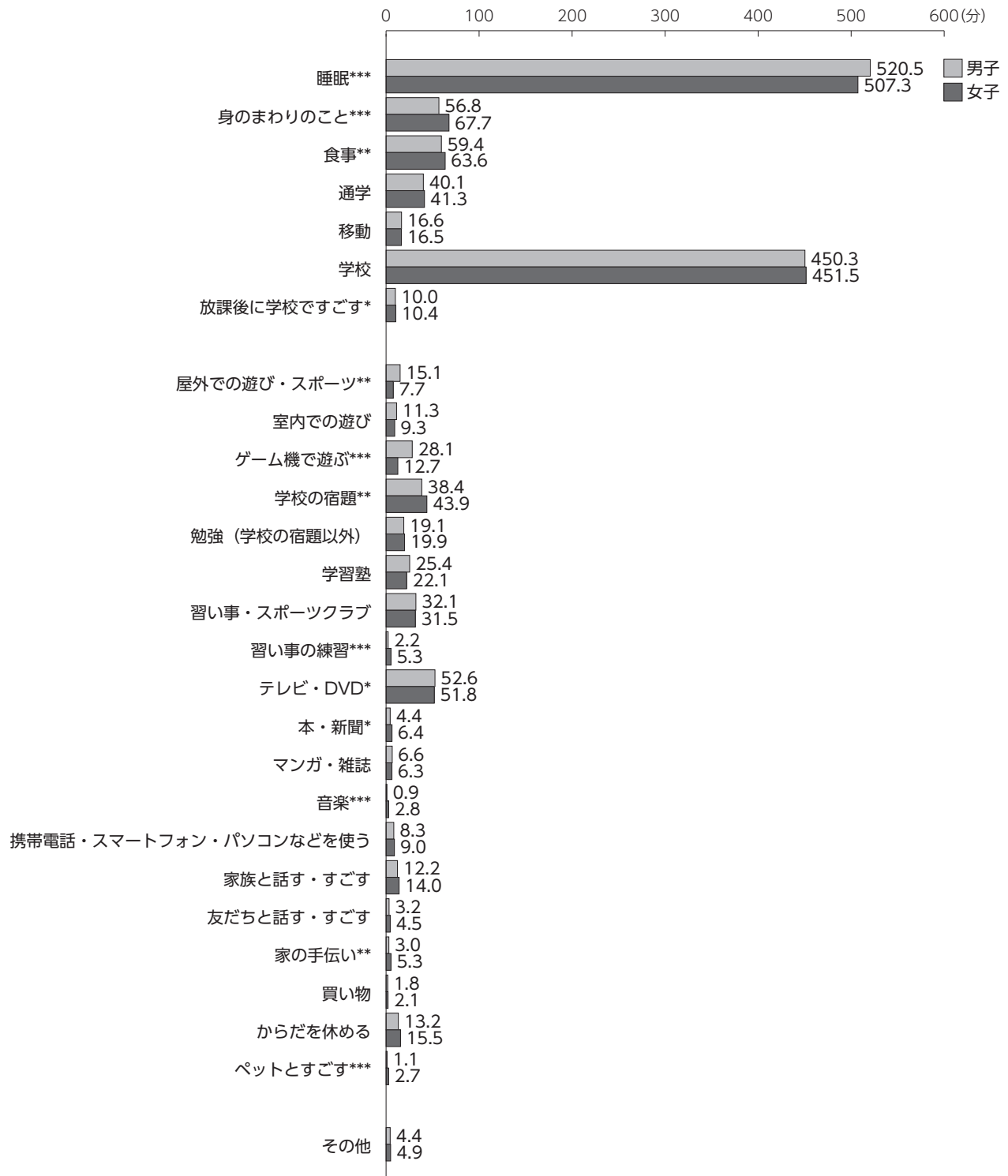
い。

女子は男子よりも短く眠って（平均13分の差、以下同様）、身のまわりのこと（平均11分）や食事（平均4分）に時間を使い、さらに宿題（平均6分）や習い事の練習（平均3分）をし、音楽（平均2分）を楽しんでペットとすごし（平均2分）、家の手伝い（平均2分）をする傾向にある。男子は女子よりも長く眠って、屋外やゲームで遊ぶ（屋外遊びは平均7分、ゲームは平均

16分）という点に、小学校段階での男女の違いがある。

ひとつひとつの行動に費やす時間の違いはわずか数分であるが、大人と比較すれば睡眠時間が長く、学校での時間が長い子どもは、限られた24時間のなかで選択的に行動しなければならず、わずかな時間の違いの集積が、生活全体の違いとなる。小学生であっても、男女では生活時間のパターンに違いがみられる。

図1 全体平均時間（小学生・男女別）



注1 無回答・不明は分析から除外した。

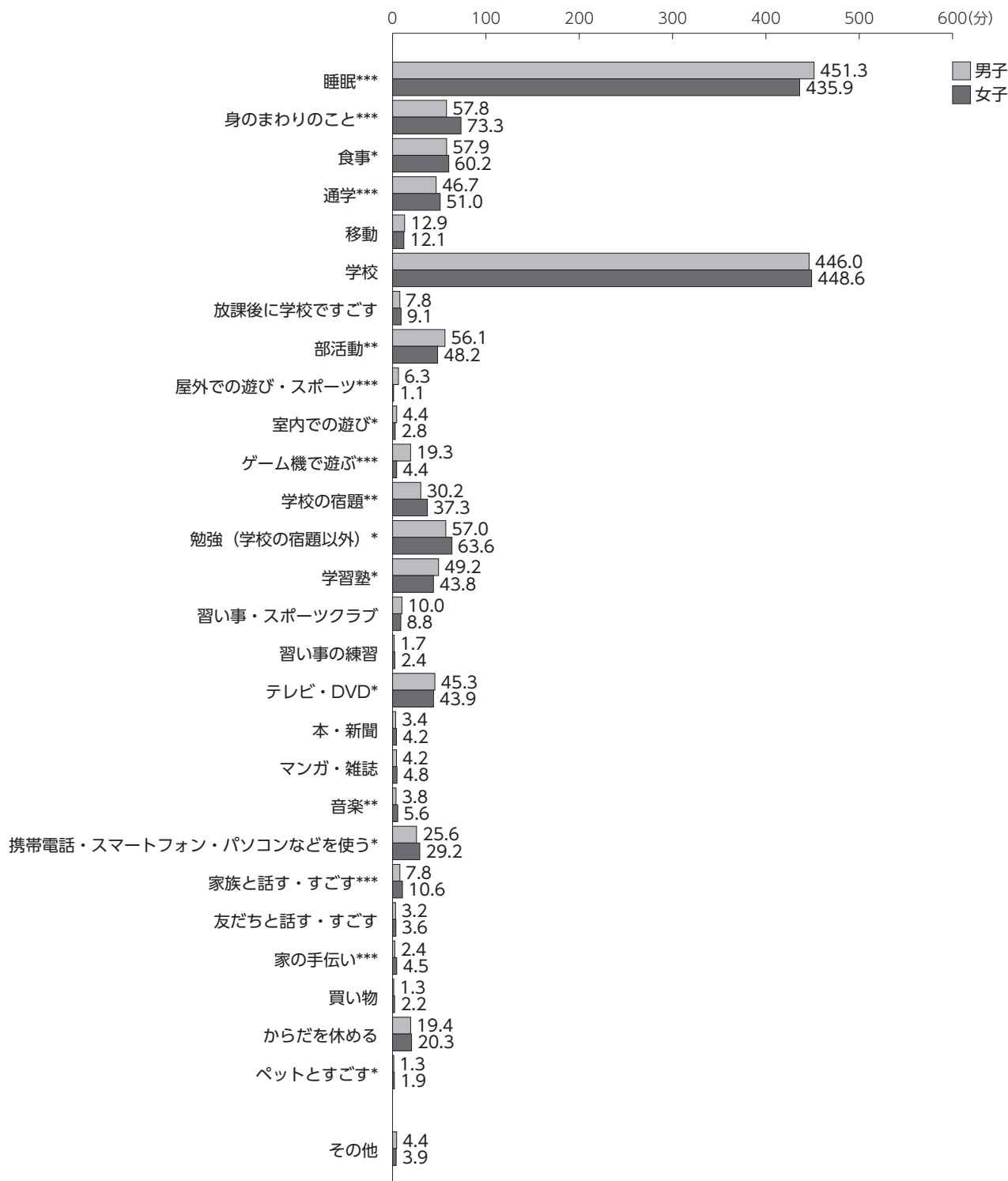
注2 ***p < 0.001、**p < 0.01、*p < 0.05。

中学生では、0.1%水準で有意な差がある行動は8項目で、睡眠、身のまわりのこと、通学、屋外遊び、ゲーム、宿題、家族と話す・すごす(以下、家族とすごす)、家の手伝い、である。男子のほうが長いのは睡眠、屋外遊び、ゲームの3項目である。1%水準で有意なのは部活動と音楽で、部活動は男子が、音楽は女子のほうが長い。

男子と女子とを比較すると、男子が「よく眠り、よく

遊び、よく部活動をする」生活を送っている。屋外遊びは平均5分長く、部活動は平均8分長い。それに対して、女子は男子よりも睡眠時間が短く(平均15分)、身のまわりのこと(平均16分)や食事(平均2分)に時間をかけ、宿題(平均7分)をして、家族とすごしたり(平均3分)家の手伝い(平均2分)をしたりして、さらに音楽を楽しむ(平均2分)生活をしていると言えるだろう。

図2 全体平均時間(中学生・男女別)



注1 無回答・不明は分析から除外した。

注2 ***p < 0.001、**p < 0.01、*p < 0.05。

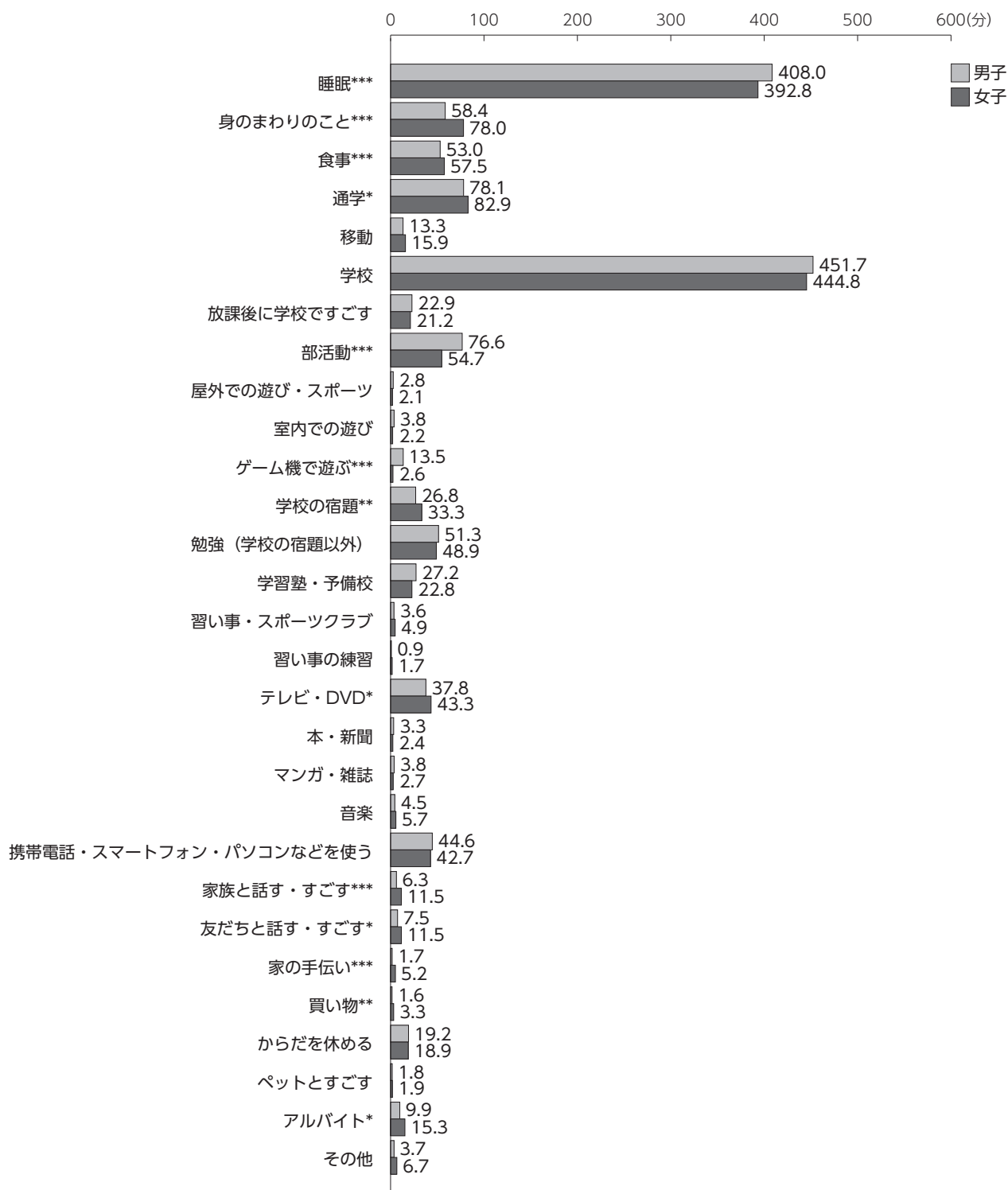
第3章 子どもの生活時間にみる男女の違い

高校生では、0.1%水準で有意な男女差がある行動は、睡眠、身のまわりのこと、食事、部活動、ゲーム、家族と過ごす、家の手伝い、の7項目になる。男子のほうが長いのは睡眠と部活動とゲームである。1%水準で有意な行動は宿題と買い物の2項目で、いずれも女子のほうが長い。

中学生と同様に、女子は男子よりも睡眠時間（平均15分）が短く、身のまわりのこと（平均20分）や食

事（平均5分）が長い。学校段階が上がるほど、女子が身のまわりのことにかかる時間は長くなっている。また、男子よりも長く宿題をし（平均7分）、家族と過ごし（平均5分）、家の手伝いをし（平均3分）、買い物をしている（平均2分）。それに対して、男子では部活動に費やす時間が大きく増加しており、女子よりも長くなっている（平均22分）。ゲームも小・中学生よりは短くなっているが、女子よりも長い（平均11分）。

図3 全体平均時間（高校生・男女別）



注1 無回答・不明は分析から除外した。

注2 ***p < 0.001、**p < 0.01、*p < 0.05。

注3 高校生は高1～3生。

以上のことから、どの学校段階でも、男子と女子とでは生活のパターンが異なっており、男子/女子それぞれに特有のパターンは各学校段階で大きく変化してはいないようである。また、中学校で始まる部活動では男子の

ほうが平均的に長い時間を費やし、一方、高校から可能になるアルバイトでは女子のほうが長くなる傾向があると言える。

第2節 行為者率と行為者平均時間

前節では全体での平均時間をみた。全体平均時間は、その社会的な集団が、それぞれの活動にどの程度の時間を費やしているかをみたものである。ここで言えば、小学生男子や小学生女子、中学生男子、中学生女子、高校生男子、高校生女子が、社会的集団となる。

睡眠のように、誰もがやっている行動は行為者率がほぼ100%となり、行為者平均時間と全体平均時間はほぼ一致する。けれども、選択的な行動であれば、その行動にまったく時間をかけない人が含まれる場合も少なくない。全体平均時間が短い行動だからといって、誰もがその行動にほんの少しの時間しかかけていないとは限らない。その行動を選択する人が少なく、つまり行為者率が低い場合には、行為者の時間は長くても、全体平均時間は短くなる。各行動の特徴を明らかにするためには、全体平均時間だけでなく、行為者率と行為者平均時間をみておく必要がある。ここでは、男女の違いと行為者率とに統計的に有意な関連がある行動を中心にみていくことにする。

1) 放課後に学校ですぐす時間(表1)

放課後に学校ですぐす時間は、小学生と中学生で性別と行為者率との関連性は1%水準で有意であるが、高校生では有意ではなくなる。小学生の行為者率は、男子15.4%、女子19.5%で、女子のほうが多いが、その差

は小さい。同様に、中学生でも男子13.0%、女子16.4%で、やはり女子のほうが多い傾向があるが、男女とも小学生よりも少ない。それに対して、高校生では男子25.3%、女子24.4%で、男女とも10ポイントほど中学生よりも増加しており、統計的には有意ではないものの、男子のほうがやや多くなっている。

小学生の女子は、男子よりも放課後に学校ですぐすことが多いが、行為者平均時間をみると、男子が64.7分(標準偏差50分、以下同様)、女子が53.5分(42分)で、時間としては5%水準で有意であり、男子のほうが学校に長く残るようである。

中学生では、男女の違いは行為者率のみが有意であって、行為者平均時間の違いは統計的に有意ではない。男子60.2分(76分)、女子55.6分(57分)で、小学生とほぼ同じ時間である。高校生になると、行為者率にも行為者平均時間にも男女の違いはなくなる。小・中学生よりも多くが放課後の時間を学校ですぐすしており、男子で平均90.3分(64分)、女子で平均86.9分(62分)を学校ですぐすしている。

放課後、学校でおしゃべりなどをして放課後の時間をすぐす子どもは、どの学校段階でも、それほど多くはないが、高校生では4分の1ほどになる。また、その平均時間は、小・中学生では1時間程度、高校生では1時間半程度であることがわかる。

表1 行為者率・行為者平均時間(放課後に学校ですぐす時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	15.4%	19.5%	64.7	53.5	50	42
中学生	13.0%	16.4%	60.2	55.6	76	57
高校生	25.3%	24.4%	90.3	86.9	64	62

注 高校生は高1～3生。

2) 部活動の時間 (表2)

部活動の行為者率は、中学生では男子47.5%、女子45.7%で、ほぼ半数弱が行っており、性別と行為者率との間には統計的に有意な関連性はない。それに対して、高校生では男子44.3%、女子36.0%で、男子のほうが0.1%水準で有意に多くなっている。

行為者平均時間をみると、中学生の男子で118.1分(58分)、女子で105.5分(55分)となっており、2時間弱であるが、行為者平均時間には0.1%水準で有意な違いがあり、男子のほうが長くなっている。高校生では行為者平均時間はさらに長くなって2時間を超え、男子172.8分(77分)、女子152.1分(66分)である。ここでも、男子のほうが長く部活動を行っており、0.1%水準で有意である。

ここから、男女によって部活動とのかかわり方が異なることが示唆される。中学生では部活動への参加それ自体には男女の違いはないが、時間的には男子のほうが多くの時間を部活動に費やしている。高校生では、部活動へ参加する女子が少なく、また参加した場合でも、男子よりはやや少ない時間となっている。

3) 屋外での遊び・スポーツの時間 (表3)

子ども時代、とくに小学生の頃には、屋外で遊ぶことが子どもの成長にとって重要であることが指摘されているが、その一方で、近年、屋外で遊ぶ子どもが少なくなっていることも報告されている。

屋外で遊ぶ小学生の行為者率は、男子21.3%、女子11.4%で、男子のほうが女子の2倍ほどになっており、統計的にも0.1%水準で有意である。中学生になると男女とも減少し、男子7.5%、女子2.1%となるが、やはり男子のほうが多く、0.1%水準で有意である。高校生ではさらに減少して、男子3.9%、女子3.3%となり、男女による有意な違いはみられない。小学生男子を除けば、屋外での遊びは、きわめて少数が選択的に活動になっていると言える。

行為者平均時間をみてみよう。小学生男子の行為者平均時間は70.8分(48分)、女子は67.7分(42分)で、行為者率は男子のほうが高いが、行為者平均時間については有意な違いはない。一方、中学生では行為者率だけでなく行為者平均時間にも1%水準で有意な違いがある。中学生男子では84.0分(72分)、女子50.1分(39分)で、小学生と比較すると、男子の行為者平均時間は長くなっている一方、女子では短くなっている。

男女の行為者率の違いが統計的に有意ではない高校生の行為者平均時間は、男子71.9分(69分)、女子63.6分(47分)で、男女とも行為者率は小さいが、行為者平均時間をみると、男子は中学生男子よりも10分程度短いだけで、女子ではむしろ長くなっている。高校段階になると、屋外で遊ぶという活動は極めて選択的になるが、行う場合にはかなりの時間があてられることがわかる。

表2 行為者率・行為者平均時間(部活動の時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
中学生	47.5%	45.7%	118.1	105.5	58	55
高校生	44.3%	36.0%	172.8	152.1	77	66

注 高校生は高1～3生。

表3 行為者率・行為者平均時間(屋外での遊び・スポーツの時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	21.3%	11.4%	70.8	67.7	48	42
中学生	7.5%	2.1%	84.0	50.1	72	39
高校生	3.9%	3.3%	71.9	63.6	69	47

注 高校生は高1～3生。

表4 行為者率・行為者平均時間(ゲーム機で遊ぶ時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	44.6%	22.8%	63.1	55.6	47	43
中学生	25.4%	7.1%	76.2	62.1	68	51
高校生	15.4%	3.6%	88.1	72.1	77	75

注 高校生は高1～3生。

4) ゲーム機で遊ぶ時間(表4)

屋外での遊びに代わって、現代の子どもの遊びの主要部分を占めていると言われているのがコンピュータ・ゲームやテレビ・ゲームなどのゲーム機での遊びである。これらの遊びに、子どもたちはどのような時間の使い方をしているのだろうか。

まず、行為者率からみると、どの学校段階でも性別と行為者率とは0.1%水準で有意な関連性があり、ゲーム機での遊びは男子のほうが多くなっている。小学生では男子44.6%、女子22.8%である。小学生男子では半数近くがゲーム機での遊びを行っている。中学生になると、男子25.4%、女子7.1%で、男女とも減少しているものの、中学生女子は急速に「ゲーム離れ」をしているようである。高校生では、男子15.4%、女子3.6%で、男女とも、ほとんどがゲーム機での遊びを「卒業」しているのかもしれない。

小学生男子では半数弱が行っているゲーム機での遊びであるが、行為者平均時間をみると、63.1分(47分)で1時間をわずかに超える。「ゲームは1時間まで」という親との約束がなされているのだろうか。女子の行為者平均時間は55.6分(43分)で、男子よりも行為者率は低い。費やす時間にはそれほど大きな違いはなく、統計的にも有意ではない。

中学生では、男子76.2分(68分)、女子62.1分(51分)で、行為者率から「ゲーム離れ」をしていると考えられる女子でも、行う場合には1時間以上を費やしている。男女の行為者平均時間には有意な違いはない。高校生では、男子88.1分(77分)、女子72.1分(75分)で、男女とも中学生よりも行為者平均時間が長く、男女の違いは0.1%水準で有意となっている。

ゲーム機での遊びは、屋外遊びと同様に、小学生男子では行為者率が高く、一定の時間が費やされているが、学校段階が上がるるとともに行為者率は徐々に少なくな

る。けれども、選択的に行う場合には、その行為時間には大きな変化が生じないか、あるいは逆に増加することもあり得るようである。

5) 学校の宿題の時間(表5)

学校の宿題の行為者率は、どの学校段階でも、0.1%水準から1%水準で男女による違いがあり(中学生のみ0.1%水準、他は1%水準)、女子のほうが高くなっている。宿題が課せられる確率が男女で異なるとは考えにくいから、課せられた宿題をきちんと行おうとする傾向が男女で異なるとみることができる。宿題については、明らかに女子のほうが「真面目」だと言えるだろう。

小学生男子の行為者率は83.3%、女子は86.9%である。小学生では男女とも、8割以上が宿題を行っている。中学生では、男子53.7%、女子60.2%で、小学生と比較すると宿題が課せられることが少ないようである。高校生では行為者率はさらに少なく、半数を下回っており、男子41.3%、女子47.1%となっている。

宿題にかかる時間をみてみると、小学生男子46.1分(28分)、女子50.5分(32分)で、女子は行為者率が高いだけでなく、行為者平均時間もやや長くなっており、その違いは0.1%水準で統計的に有意である。女子は「真面目」に「丁寧」に宿題に取り組んでいるようである。

中学生でも男女の行為者平均時間は5%水準で有意な違いがあり、男子56.4分(41分)、女子62.0分(47分)となっている。高校生では、男女の違いは統計的には有意ではないが、男子65.0分(45分)、女子70.9分(47分)で、女子のほうがやや長くなっている。学校の宿題については、学校段階にかかわらず、行為者率・行為者平均時間も女子が男子を上回っている。また、どの学校段階でも、宿題を行う場合の平均時間は1時間前後となっていることがわかる。

表5 行為者率・行為者平均時間（学校の宿題の時間）

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	83.3%	86.9%	46.1	50.5	28	32
中学生	53.7%	60.2%	56.4	62.0	41	47
高校生	41.3%	47.1%	65.0	70.9	45	47

注 高校生は高1～3生。

表6 行為者率・行為者平均時間（勉強（学校の宿題以外）の時間）

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	36.1%	36.6%	52.7	54.4	52	47
中学生	55.8%	59.2%	102.0	107.4	81	86
高校生	44.1%	41.6%	116.2	117.6	91	84

注 高校生は高1～3生。

6) 勉強（学校の宿題以外）の時間（表6）

学校の宿題以外の勉強は、行為者率からみると男女の違いが小さい活動である。小学生と高校生では有意な関連性がなく、中学生でも5%水準である。小学生男子で36.1%、小学生女子36.6%、中学生男子で55.8%、中学生女子59.2%、高校生男子で44.1%、高校生女子41.6%である。宿題以外の勉強を行う比率は中学生がもっとも高く、とくに女子では行為者率が約6割に達する。次いで高校生、小学生の順となる。

行為者率から、小学生の家庭学習においては学校の宿題の比重が大きいと考えられるが、行為者平均時間をみると、やや異なる子どもたちの姿がみえる。男子52.7分(52分)、女子54.4分(47分)で、宿題の平均時間よりも長い。中学受験に備えている子どもたちだろうか、3分の1ほどの小学生は、他の子どもたちよりも1時間弱長く勉強時間を確保しているようである。なお、この男女の違いは統計的には有意ではない。

中学生で宿題以外の勉強の行為者率が高いのは、高校

受験の影響だろう。このことを反映してか、行為者平均時間も格段に長くなっている。男子102.0分(81分)、女子107.4分(86分)で、1時間半以上が宿題以外の勉強にあてられている。行為者平均時間には統計的に有意な男女の違いはない。男女を問わず、より多くの子どもが、より長時間、学校以外の勉強をするようになるのが中学生の時期といえることができる。また、男女それぞれの時間の標準偏差も大きく、勉強時間の個人差が大きくなるのも、この時期だと言える。

高校生では行為者率には有意な違いはなかったが、行為者平均時間は5%水準で有意である。男子では116.2分(91分)、女子117.6分(84分)で、ほぼ変わらない。むしろ、標準偏差から、宿題以外の勉強は、男女の違いというよりも、個人の違いによって時間のかけ方が大きく異なっていると言える。勉強するかしないか、するとしても、どれだけの時間をかけるかが、個人的な選択になっていると考えることができる。

7) テレビ・DVDの時間(表7)

テレビ・DVDの時間の行為者率は、小学生と中学生では男女に有意の違いはないが、高校生になると5%水準で有意な違いがある。すべての学校段階を通じて、どちらかと言えば、女子のほうが多く行う傾向にある。小学生男子68.3%、小学生女子70.4%、中学生男子59.1%、中学生女子61.5%、高校生男子48.8%、高校生女子52.9%となっており、学校段階が上がると行為者率は小さくなる。

行為者平均時間をみると、小学生では男子77.0分(53分)、女子73.6分(48分)で、有意な違いはないが標準偏差はかなり大きく、個人差が大きい。中学生でも視聴時間には大きな変化はなく、男子76.6分(57分)、女子71.4分(53分)である。女子の行為者平均時間がやや減少しており、男女の違いは5%水準で有意であるが、標準偏差が大きいことから、個人差も大きい活動と言える。

高校生では、行為者率は半数前後であるが、中学生よりも行為者平均時間が長い。男子77.4分(61分)、女子81.8分(62分)となっており、男女の違いは統計的には有意ではない。女子のほうがやや多く視聴し、しかも長く視聴していることがわかる。

8) 本・新聞の時間(表8)

テレビ・DVDなどの視聴と比較すると、本・新聞を

読む活動は、行為者率も低く、行為者平均時間も短い。行為者率と男女の関連性は有意であるが(小学生で1%水準、中・高校生で5%水準)、男女いずれが多いかは学校段階で異なる。

小学生の行為者率は、男子11.3%、女子15.2%で女子のほうが多い。この傾向は中学生でも同様で、男子8.1%、女子9.9%である。高校生では男女が逆転し、男子7.4%、女子5.3%で、高校生女子で読書離れが進んでいることがわかる。

行為者平均時間をみると、小学生では男子は39.2分(28分)、女子42.0分(37分)となっており、その差は統計的には有意ではない。同様に、中学生でも男女の行為者平均時間には有意な違いはなく、男子41.6分(43分)、女子42.4分(36分)で、小学生と比較して、行為者率は小さくなっているが、行為者平均時間には大きな変化はない。高校生の行為者平均時間は、男子44.8分(35分)、女子45.4分(27分)で、ここでも男女の違いは有意ではない。行為者率では「読書離れ」している高校生女子でも、選択的に行う場合は、男子と同程度の時間を費やしている。

学校段階にかかわらず、行為者平均時間は男女とも40分前後である。それなりの時間が確保されているが、行為者率が極めて小さい。小学校の段階から読書を習慣化する必要があるかもしれない。

表7 行為者率・行為者平均時間(テレビ・DVDの時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	68.3%	70.4%	77.0	73.6	53	48
中学生	59.1%	61.5%	76.6	71.4	57	53
高校生	48.8%	52.9%	77.4	81.8	61	62

注 高校生は高1～3生。

表8 行為者率・行為者平均時間(本・新聞の時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	11.3%	15.2%	39.2	42.0	28	37
中学生	8.1%	9.9%	41.6	42.4	43	36
高校生	7.4%	5.3%	44.8	45.4	35	27

注 高校生は高1～3生。

表9 行為者率・行為者平均時間（携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う時間）

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	14.0%	17.1%	59.4	52.4	58	47
中学生	35.5%	42.2%	72.1	69.0	59	61
高校生	56.3%	59.5%	79.2	71.7	70	59

注 高校生は高1～3生。

9) 携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う時間（表9）

近年、とくに急速に普及が進んでいるスマートフォンの使用が、子どもの生活時間のなかで大きな位置を占めるようになってきていることが指摘されている。上記でみた「読書離れ」と結びつけた議論もみられる。この点についてみてみよう。

男女別の行為者率については、小・中学生では0.1%水準で統計的に有意な関連性があり、高校生では5%水準であるが、女子のほうが男子よりも行為者率が高い傾向にある。また、学校段階が上がるとともに行為者率は高くなっている。

小学生では男子の行為者率は14.0%、女子は17.1%で、10%台にとどまっている。中学生では倍以上となり、男子35.5%、女子42.2%である。高校生になると過半数が使用しており、男子56.3%、女子59.5%となっている。

行為者平均時間をみると、小学生では男女の違いは有意ではない。男子59.4分(58分)、女子52.4分(47分)で、男子よりも行為者率がやや高い女子でも、行為者平均時間がとくに長いわけではなく1時間程度で、むしろ、標準偏差からもわかるように個人差が大きい。

中学生になると、行為者率が高くなるだけでなく、行為者平均時間も少し長くなる。男子72.1分(59分)、女子69.0分(61分)で、男女の違いは有意ではない。高校生では男女の違いは10%水準で有意で、男子79.2分(70分)、女子71.7分(59分)と、行為者平均時間からみると、男女とも中学生より長時間利用している傾向がみられ、また標準偏差が大きいことから個人差も大

きいことがわかる。

参考までに、携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う時間と本・新聞の時間との相関をみたが、どの学校段階でも両者には統計的に有意な関連性はなかった。携帯電話・スマートフォン・パソコンを使うから読書をしなくなるのではなく、携帯電話・スマートフォン・パソコンを利用してもしなくても、読書をする子どもは読書をするし、しない子どもはしないということになる。

10) 家族と話す・過ごす時間（表10）

家族と話す・過ごす時間をもつか否かは、どの学校段階でも男女によって統計的に有意な違いがある（小学生で5%、中・高校生で0.1%水準）。女子に比べると、男子では学校段階が上がるにつれて、時間的には「家族離れ」していく傾向をみることができ。行為者率をみると、小学生男子27.6%、小学生女子31.6%、中学生男子20.7%、中学生女子27.0%、高校生男子16.8%、高校生女子24.9%である。

行為者平均時間をみてみよう。行為者平均時間については、いずれの学校段階でも男女の差は統計的には有意ではなかった。小学生では男子44.3分(35分)、女子44.4分(32分)となっている。男子の「家族離れ」が始まる中学生では、男子37.9分(28分)、女子39.3分(30分)で、男子でも行為者平均時間が大幅に少ないわけではない。高校生でも同様に、男子37.2分(29分)、女子46.3分(47分)となっている。中・高校生の男子では、行為者率は低いが、必ずしも行為者平均時間が短いわけではない。

表10 行為者率・行為者平均時間(家族と話す・過ごす時間)

学校段階	行為者率		行為者平均時間(分)		標準偏差(分)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
小学生	27.6%	31.6%	44.3	44.4	35	32
中学生	20.7%	27.0%	37.9	39.3	28	30
高校生	16.8%	24.9%	37.2	46.3	29	47

注 高校生は高1～3生。

以上でみてきたように、睡眠や身のまわりのことなど男女で行為者率は同じでも平均時間が異なる活動がある一方、部活動や学校の宿題のように行為者率・行為者平均時間も男女で違いのある活動もあれば、本・新聞や

家族と過ごすなど、行為者率は異なるけれども行為者平均時間には男女の差がみられない活動もある。これらの複合的な違いが、男女の生活パターンの違いを生み出していることになる。

第3節 拡大する男女のパターンの違い

前節では行為者率と行為者平均時間を用いて、各活動の特徴を明らかにしたが、ここでは、再び全体平均時間を用いて、社会的集団としての男女それぞれがもつ生活時間のパターンの変化についてみることにしたい。

第1節でみたように、すべての学校段階において男女による生活パターンの違いは存在する。けれども、その違いが、学校段階が上がるとともに、どのように変化するかは、あまり明確ではなかった。ここでは、矢野(1995)で用いられている方法によって、その変化に焦点をあてることにしよう。具体的には、各活動における全体平均時間の男女の差をとり、その絶対値をすべての行動について合計することによって、男女の違いをみることになる。第1節でみた各行動に費やしている時間のわずかな違いが積み重なることによって、1日24時間の使い方にもどのような違いが生まれているのかを明らかにする方法である(表11)2)。

合計値をみると、小学生では85分の違いがあり、1日のうち1時間25分が男女によって異なる活動にあてられていることがわかる。この違いは、中学生では109分、高校生では140分と、学校段階が上がるとともに拡大している。高校生の場合は、男女によって2時間20分が異なる活動にあてられている。

この違いは、とくにどのような活動によって、もたらされているのだろうか。学校での時間(「学校」の時間と「放課後に学校ですぐす」時間の合計)と部活動の時

間を合計した「学校空間の時間」は、小学生では女子が1.6分ほど長い、中学生で逆転し、男子が3.9分長くなる。この傾向は高校生でより明らかになり、男子が女子よりも30.4分長く「学校空間の時間」を過ごしていることがわかる。

一方、身のまわりのことや食事といった「生活の時間」は、どの学校段階でも女子のほうが長く、15.0分→17.8分→24.0分と、その差が大きくなる。また、通学や移動、買い物、アルバイトなど一種の公共空間ですぐす時間も女子のほうが長い傾向がある。

簡単にまとめれば、学校段階が上がるとともに、男子は「学校化」するのに対して、女子は「私的空間」や「公共空間」での時間が多くなり、そのために男女の違いが大きくなっていることがわかる。

こうした男女の違いが、10代ですでに拡大していることが明らかである。日本社会の特徴である性別役割分業が、家庭や学校での「見えないカリキュラム」によって、少しずつ内面化されているのだろうか。そのために、大人になってからの性別役割分業が受け入れやすくなっているのかもしれないが、これらの点を明らかにするには、他の資料も検討する必要がある。また、子どものときからの性別役割分業を日本の特徴として指摘するためには、国際比較データなどもふまえて考える必要がある。こうした検討については、今後の課題としたい。

表11 全体平均時間（学校段階別・男女別）

(分)

	小学生			中学生			高校生		
	全体平均時間		男女差 (絶対値)	全体平均時間		男女差 (絶対値)	全体平均時間		男女差 (絶対値)
	男子	女子		男子	女子		男子	女子	
睡眠	520.5	507.3	13.3	451.3	435.9	15.5	408.0	392.8	15.1
身のまわりのこと	56.8	67.7	10.9	57.8	73.3	15.5	58.4	78.0	19.6
食事	59.4	63.6	4.1	57.9	60.2	2.3	53.0	57.5	4.5
通学	40.1	41.3	1.2	46.7	51.0	4.3	78.1	82.9	4.8
移動（通学以外）	16.6	16.5	0.2	12.9	12.1	0.8	13.3	15.9	2.6
学校	450.3	451.5	1.2	446.0	448.6	2.7	451.7	444.8	6.9
放課後に学校ですごす（部活動以外）	10.0	10.4	0.4	7.8	9.1	1.3	22.9	21.2	1.6
部活動				56.1	48.2	7.9	76.6	54.7	21.9
屋外での遊び・スポーツ	15.1	7.7	7.4	6.3	1.1	5.2	2.8	2.1	0.8
室内での遊び	11.3	9.3	2.0	4.4	2.8	1.6	3.8	2.2	1.6
ゲーム機で遊ぶ	28.1	12.7	15.5	19.3	4.4	14.9	13.5	2.6	11.0
学校の宿題	38.4	43.9	5.5	30.2	37.3	7.0	26.8	33.3	6.5
勉強（学校の宿題以外）	19.1	19.9	0.8	57.0	63.6	6.6	51.3	48.9	2.4
学習塾・予備校	25.4	22.1	3.3	49.2	43.8	5.4	27.2	22.8	4.4
習い事・スポーツクラブ	32.1	31.5	0.6	10.0	8.8	1.2	3.6	4.9	1.3
習い事の練習	2.2	5.3	3.1	1.7	2.4	0.7	0.9	1.7	0.9
テレビ・DVD	52.6	51.8	0.8	45.3	43.9	1.4	37.8	43.3	5.5
本・新聞	4.4	6.4	2.0	3.4	4.2	0.8	3.3	2.4	0.9
マンガ・雑誌	6.6	6.3	0.3	4.2	4.8	0.6	3.8	2.7	1.2
音楽	0.9	2.8	1.9	3.8	5.6	1.8	4.5	5.7	1.2
携帯電話・スマートフォン・パソコンなどを使う	8.3	9.0	0.7	25.6	29.2	3.5	44.6	42.7	2.0
家族と話す・すごす	12.2	14.0	1.8	7.8	10.6	2.8	6.3	11.5	5.3
友だちと話す・すごす	3.2	4.5	1.2	3.2	3.6	0.4	7.5	11.5	4.1
家の手伝い	3.0	5.3	2.3	2.4	4.5	2.0	1.7	5.2	3.5
買い物	1.8	2.1	0.4	1.3	2.2	0.9	1.6	3.3	1.7
からだを休める	13.2	15.5	2.3	19.4	20.3	0.9	19.2	18.9	0.3
ペットとすごす	1.1	2.7	1.6	1.3	1.9	0.6	1.8	1.9	0.1
アルバイト							9.9	15.3	5.5
その他	4.4	4.9	0.5	4.4	3.9	0.5	3.7	6.7	3.0
男女差（絶対値）の合計	85			109			140		

注 無回答・不明は分析から除外した。

- 1) 対象は日本の他、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・カナダの5カ国である。
- 2) ここでは、どのような行動をしていたかがわからない「無回答・不明」の時間を除いて合計値を集計している。

< 参考文献 >

伊藤セツ・天野寛子編著 1989 『生活時間と生活様式』 光生館
 大竹美登利 1997 『大都市雇用労働者夫婦の生活時間における男女平等』 近代文芸社
 矢野真和・連合総合生活開発研究所 1998 『ゆとりの構造——生活時間の6カ国比較』 日本労働研究機構
 矢野真和 1995 『生活時間の社会学』 東京大学出版会